

名古屋芸術大学

研究紀要

第39巻 別冊（作品集）

2018. 3

木彫による造形研究 2016 クロッキー&ドローイング
..... 岩井 義尚 001

台湾新竹市立鶯歌陶磁博物館における個展「一月下」について
Exhibition at New Taipei city Yingge Ceramic Museum (Taiwan) ” Moon Light”
2017 / 2 / 24 ~ 4 / 9
..... 加藤 真美 007

THE MEDALS WHICH PRAISES DR. CHIAKI MUKAI'S ACHIEVEMENT
..... 瀬田 哲司 013

陶による現代美術としての表現 ―工芸と現代美術の臨界点―
..... 田中 哲也 021

書道アートをめぐる(その5)
..... 横山 豊蘭 027

木彫による造形研究 2016

クロッキー&ドローイング

岩井 義尚 *Yoshinao Iwai*

(美術学部)

作品の形の素は、「自然のモノをデッサンしていると、その源は球体、それも機械的な球体ではなく、心地良い球体の単体又は複合体である」と考える。私の創作は、この考えを基に「視覚に訴えかけるのに重要である水平要素・垂直要素」そのものが創り出す空間」を使い構成している。



第 39 回 中部二元会展 2017.3.14 ~ 3.20

愛知県美術館ギャラリー 8F G1.G2.H.I 室 (名古屋市)

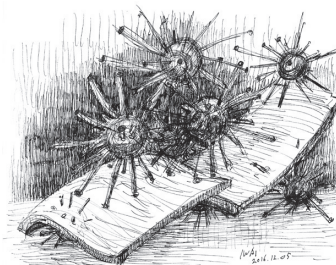
テーマ；「動き」「流れ」「生」

作品における一つの方向は、テーマからイメージし、形の根源を動物（人も含む）・植物・自然現象から創作要素を探り、構成を考慮し、素材（木）を彫ることにより形（Form）を創り出す手法で具現化した集合体で表現している。

平面作品は、ペンで描く多くのフリーハンドの線の重ねにより、人物の構成し、立体作品に影響するエスキースの要素を含むドローイングと人体クロッキー（各種描画素材）により、テーマを表現する研究をしている。



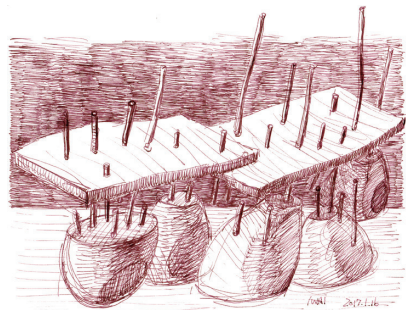
Form 1701
ケヤキ+ヒメコマツ+イチイ他
H180×W195×D205 (cm)



海の中の生物の生態や動きを研究し、海面下における世界を単純な形と二つの面、二層構造にして広がりをつけ、単体同士の繋がりがや対比により「動き」と「生」を視覚的に表現した。
(中部二元会展出品)



Form 1702
 クス+ケヤキ+ヒメコマツ+イチイ
 H142×W227×D84 (cm)



Form 1701 と同様に、海の中の生物の生態や動きを研究し、海面下や海底における世界を三層構造にし、特に「生」を意識し視覚的に表現した。(中部二元会展出品)





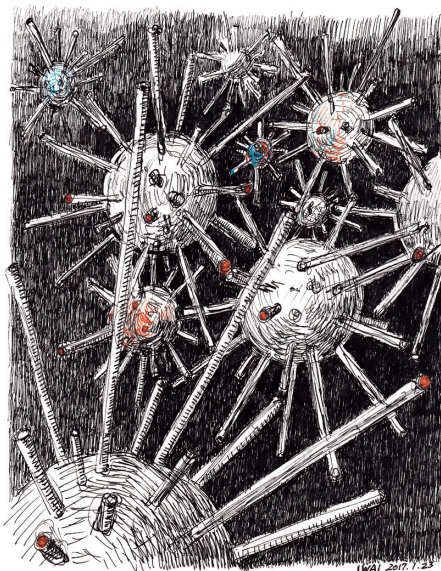
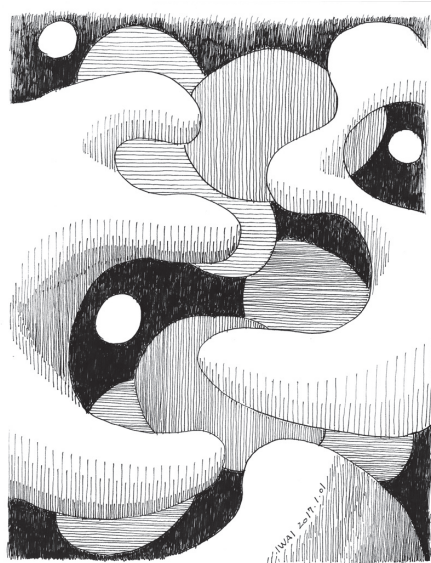
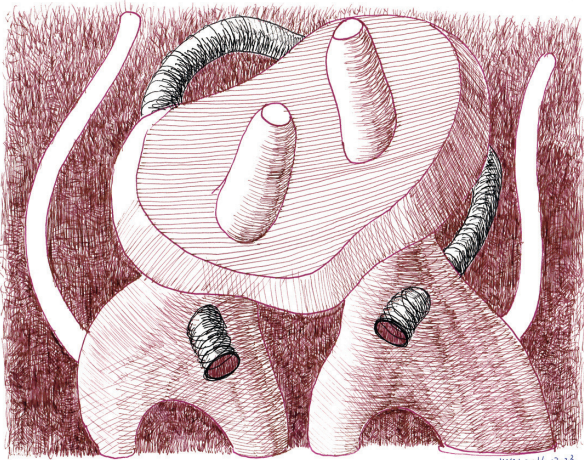
Form 1602
チーク+クス
H78×W68×D50 (cm)

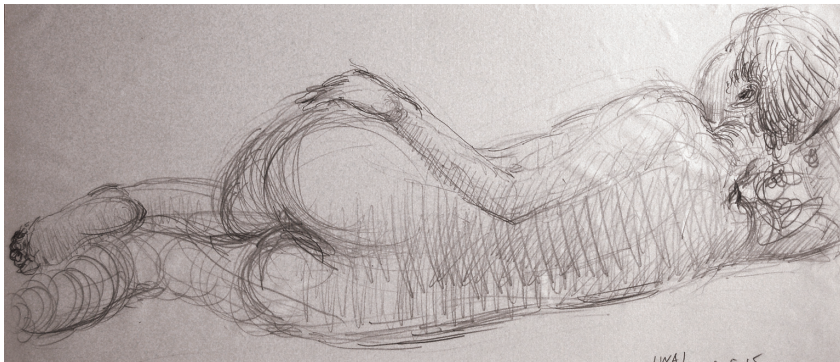
Form 1602は、人間の形を基に考え、素材の持つ色素を生かし、うねる形の積み重ねにより「生」を表現している。「木彫を楽しむ partXVII」作品展に出品

Form 1603は、ケヤキ材の一木造りで、内面の心の「動き」を、彫り込む形で表現している。中部二元会研究展に出品



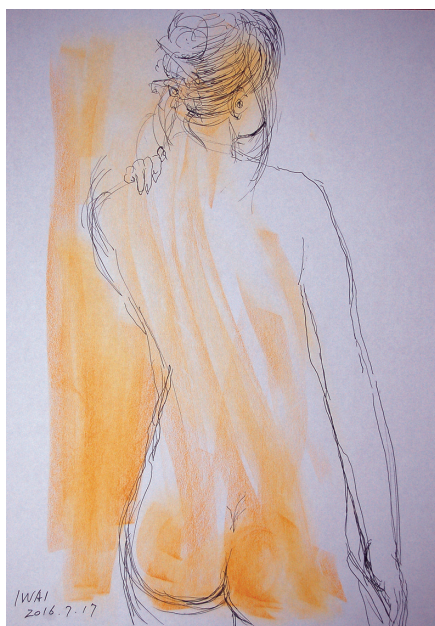
Form 1603
ケヤキ
H40×W44×D24 (cm)

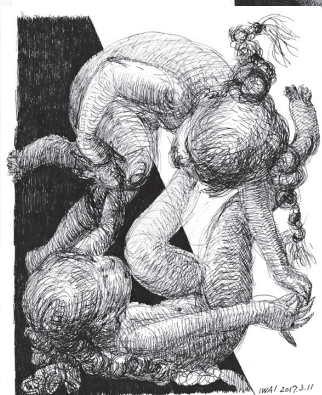




クロッキー (デッサン)

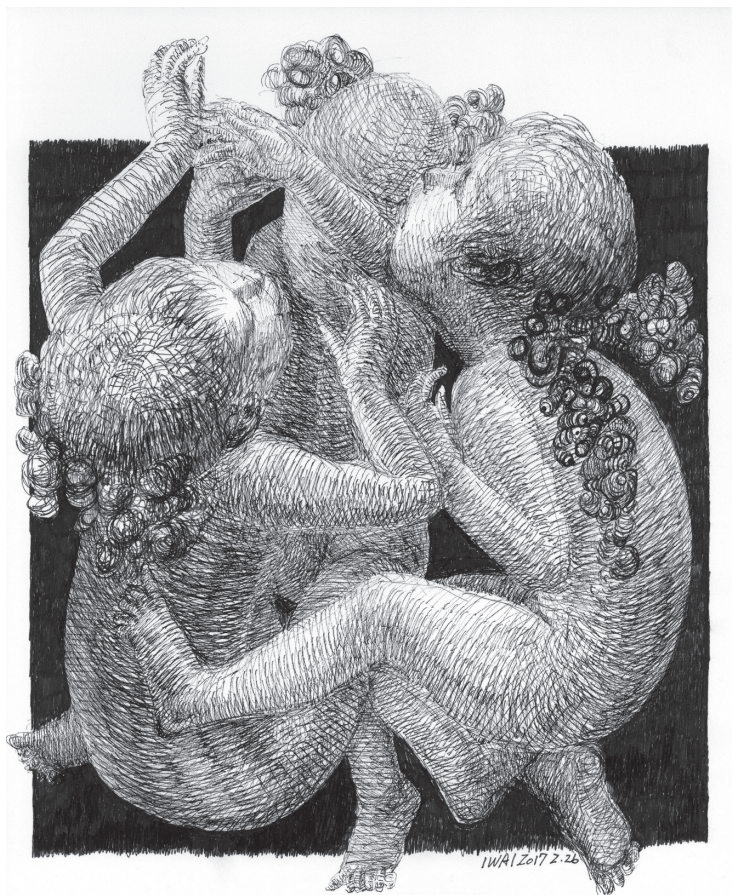
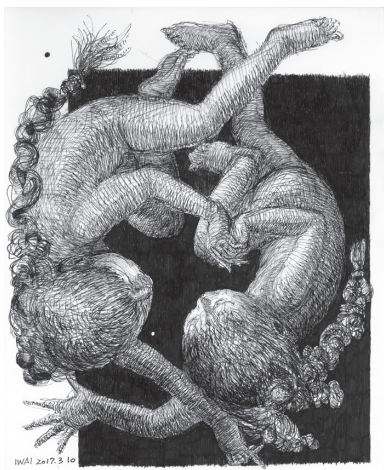
現在所属している中部二元会の研究会での成果で、和紙や上質紙に鉛筆を主に色はパステルで、「動き」「流れ」「量」を意識して描いている。同会の研究展出品及びクロッキー・デッサンの講師をしている「Art of 20 歩」の会の作品展に賛助出品している。





ドローイング

これらのペン画は（4ページ目にもある）、立体やレリーフ作品のためのアイデアを平面考察したもので、浮遊した子供の形を借りて、「動」を特に意識し表現している。



台湾新竹市立鶯歌陶磁博物館における個展「月下」について
Exhibition at New Taipei city Yingge Ceramic Museum (Taiwan) " Moon Light"
2017 / 2 / 24 ~ 4 / 9

加藤 真美 *Mami Kato*
(芸術学部)

2017年初頭、台湾新竹市立鶯歌陶磁博物館で展示をする機会を得た。

会場は地下1階、長さ30mの陶芸長廊 Ceramic Hallway である。

画像と共に作品群と制作時の思いを振り返ってみた。

At the beginning of 2017,I had a chance to have my solo show exhibition at Yingge Ceramic Museum.(Taiwan) The venue was 30m-long Ceramic Hallway in the basement.

I looked back my works and thoughts at the time of making them with the images.



「月下」"Gekka" (Moon Light)

萩大賞 2017 佳作賞 新竹市鶯歌陶磁博物館収蔵

Hagi Grand Prix 2017 Honorable Award, Collection of Yingge Ceramics Museum 45.5 × 42 h. 32

私は長らく作陶しながらも、これぞという自分の心を託せる表現を見出せずにいた。迷いの果てに辿り着いたのは焼き物原初のうつわ、“碗”の形であった。碗の豊かな内包的空間と、自分の心の中に答えを探したずねながら形作ってゆく過程は結果、否定していた自身を受け入れ、認め、許す、という事を可能にしてくれた。私にとってうつわとは自身を託すことができる精神的宇宙である。

「月下」というタイトルは、高みから静かに落ちくる月光を浴び 満ち湛える普遍の存在、というイメージによった。もし見る人が彼らの囁き、秘やかな溜め息を聞いたならば、その人もまた普遍の月下に佇む存在、私の作品の一部である。

It took ages to find a suitable form to express myself. While struggling, what I finally made was 'Ustsuwa' (Bowl). 'Ustsuwa' means not only a bowl but capacity as well. Creating the rich inner space of a bowl healed me and it allowed, accepted and forgave me. Through the creation process, I could come to the stage to allow, accept and forgive myself.

'Moon Light' was titled for this exhibition from the image of quiet existence filled with moonlight falling down from the sky. If you hear their whisper or sigh, you've already been those who are quietly standing under the moon, a part of my works.





「佇」 *Tatazumu*

空間を内包するかたちは、
想いはらむ人の佇まいのように感じる
The form having a space feels like an
appearance of a human having thoughts.

12×12 h. 16 (cm)



「月明り」 *Tsukiakari*

開けられた口からは
囁きや溜め息が幽かに
Whispering and sighing breathes
gently from the opened mouth.

14 ~ 15×13 h. 15 ~ 23.5 (cm)



「ゆくえ」 *Yukue*

漂い出る何かにかたちを与える
Giving a form to things drifting.

8.5×12 h. 38.5 (cm)



「月下」 *Gekka*

どっしりと、冷たくも大気は揺らぐ
Even if it massive and cold,
the atmosphere wavers.

37×32 h. 35 (cm)



「月下群」 “Gekka gun”

125×125 h. 12 (cm)

アジアでは飯を盛る碗とは、共通して「食・命・家」を象徴する。日本はその内的造型に精神性、宇宙をみる。その碗を口造り・方向・傾きを様々に作り、個性あるものの集合体として表した。下画像右、同じ作品を台北のギャラリーで違う配置にしたもの。中央だった黒い碗を角に、砂をこぼす。米と砂の関係など、やや煽情的な気配が出たように思った。Asians have a common sense of Wan, a bowl for rice which symbolizes meal, home and life. Japan is deeply conscious of its inner universe. I considered the bowl made with variety of mouth, direction and inclination as a group of individual unique personality. The image on the right is the same works placed in a different arrangement when exhibiting at the gallery in Taipei. Spill the sand with the black bowl. I thought it created somewhat fueling atmosphere which made me feel the relationship between rice and sand.





会場風景 View of the venue



案内状 Invitation

海外での個展は、輸送や言語、費用の問題もあり制作以外に多くの労力を費した。広い会場では大きな作品も必要で現状のタタラ製法では大きさに限界を感じるが、今回は集合体の展示も加えボリューム感を補った。ホールは長く地下階を占有、照明の効果が高く“月下”の世界観が出せたと思う。思わぬ出来事も多く大変よい経験になった。鶯歌陶磁博物館では海外からのレジデンス制作作家も数名滞在しており、オランダの Ann Van Hoey 女史（下画像）など佳き出会いと交流の場であった。

一人で全てを行うのは時間体力気力とも実に厳しく、鶯歌陶磁博物館の関係諸氏、台湾まで同行、展示を手伝ってくれた杉本女史、ちょうど同館でレジデンス制作中にて手を貸してくれた名芸同僚田中氏に感謝したい。（一部画像提供 新竹市立鶯歌陶磁博物館, Ann Van Hoey）

The overseas exhibition required much time for the problem besides making works. Big works are necessary for a large venue .however I felt the limit on the size with the current porcelain slab making. I added the group display to cover the sense of volume.I think I could create the “Moon Light” world with the lighting effect which was high because the hall was long and underground.

It was good experience including many unexpected happenings. At Yingge Museum, several overseas artists stayed as residents and became a nice place to meet and exchange ideas with them including Ann Van Hoey.



Here I express my sincere thanks to all the related staff of Museum and friends.

(Some images are provided by Yingge Ceramic Museum, Ann Van Hoey)

THE MEDALS WHICH PRAISES DR. CHIAKI MUKAI'S ACHIEVEMENT

瀬田哲司 *Tetsuji Seta*

THE MEDALS WHICH PRAISES DR. CHIAKI MUKAI'S ACHIEVEMENT

瀬田哲司 Tetsuji Seta

I produced 3 medals which praise Dr. Chiaki Mukai's achievement.

My medal has 2 layers, and I arrange a matter, a metaphor and an art object there.

*Dr. Mukai's achievement was very various, and there were many matters,
however I chose several episodes from it.*

私は向井千秋博士の業績を讃える 3 つのメダルを制作しました。
私のメダルには 2 つの層があり、そこに私は事柄、隠喩、オブジェなどを配置します。
向井博士の業績は非常に多岐にわたり多くのことがありますが、
私はその中から幾つかのエピソードを選びました。

She went to the universe twice and made several natural scientific experiments at space.

Her first space flight stayed at space for 14 days and 17 hours and 55 minutes from July 8, 1994 to the 23rd.

That was 15384 days later after she was born.

彼女は二度宇宙へ行き、幾つかの自然科学の実験を宇宙空間でおこないました。
彼女の最初の宇宙飛行は 1994 年 7 月 8 日から 23 日で宇宙空間に 14 日 17 時間 55 分滞在しました。
それは彼女が誕生してから 15384 日後のことでした。

1st mission July 8 - 23, 1994. Four japanese rice fishes flew the universe for 15 days with Dr. Chiaki Mukai.

The name of these 4 japanese rice fishes are " COSMO " " GENKI " " YUME " " MIKI " .

They laid at the universe. That's a first thing as a vertebrate.

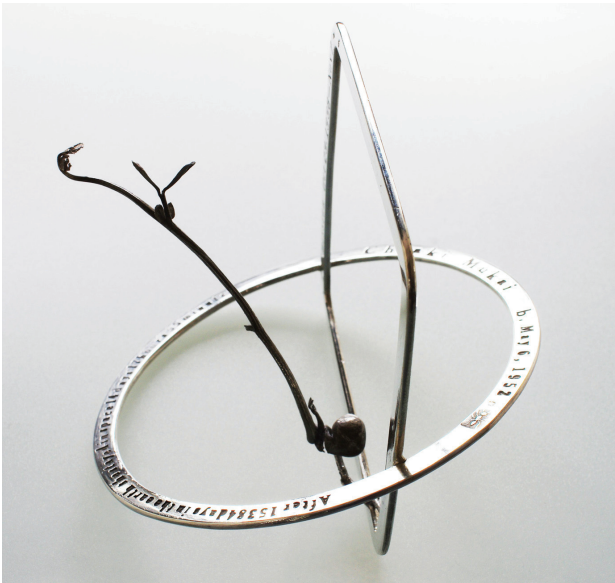
The eggs they spawned were hatched out normally.

1994 年 7 月 8 日～23 日の第一回目の宇宙飛行では向井千秋宇宙飛行士とともに 4 匹のメダカが 15 日間宇宙飛行しました。
この 4 匹のメダカは " コスモ " " 元気 " " 夢 " " 未来 " と名付けられました。
このメダカは脊椎動物として初めて、宇宙で産卵を行いました。
産卵された卵は正常に発生し、宇宙飛行中にメダカの幼魚がふ化しました。

2nd mission Oct 29, 1998 - Nov 7. Dr. Chiaki Mukai made experiments of pea and corn at space.

Without undergoing influence of gravity, The sprouts of peas tilted and grew slantingly.

1998 年 10 月末から 11 月にかけて二度目に宇宙へ行った向井千秋は、エンドウとトウモロコシの実験を行いました。
宇宙空間で重力の影響を受けずに発芽したエンドウは、斜め 45 度に傾いて成長しました。



SHE WENT TO THE SPACE TWICE

105x105x90mm 77.5g Silver 950



1ST MISSION

JULY 8, 1994 - JULY 23

100x116x39mm 82g Silver 950



2ND MISSION

OCT 29, 1998 - Nov 7

107x121x61mm 89g Silver 950

SHE WENT TO THE SPACE TWICE



Chiaki Mukai b. May 6, 1952

After 15384 days in the earth she stayed in space 14 days 17 hours 55 minutes



1st mission July 8, 1994 - July 23



2nd mission Oct 29, 1998 - Nov 7

1ST MISSION STS-65 JULY 8, 1994 - JULY 23

Chiaki Mukai b. May 6, 1952

1st mission STS-65 July 8 - 23 1994



COSUMO GENKI YUME MIKI



She took the four Japanese rice fishes to space The eggs they spawned were hatched out



Space Shuttle Columbia ov-102

2ND MISSION STS-95 OCTOBER 29, 1998- NOVEMBER 7

Chiaki Mukai b. 1952 2nd mission STS-95 October 29, 1998- November 7



The sprouts of peas tilted and grew slantingly



Space Shuttle Discovery ov-103



制作年 / Production year : 2017

製作者 / Artist : 瀬田哲司 TETSUJI SETA

制作方法 / Production method: 蝟型精密鑄造 (一部植物使用) Lost wax casting with vegetable

テーマ / Theme : Women in the Natural Sciences

展示 / Exhibition : Canadian Museum of Nature (XXXV FIDEM CONGRESS in Ottawa)

陶による現代美術としての表現 —工芸と現代美術の臨界点—

田中 哲也 *Tetsuya Tanaka*
(美術学部)

私は13年ぐらい前から、陶と陶をボルト、ナットで連結させる作品QOOシリーズを作っている。陶をボルトで連結するという技法は、今までにあったが、連結部分を一つの見せ場として建築的な美しさを提示した。また7年ぐらい前から、陶芸家にしか出来ない現代美術とは何かと考え制作している。我々陶芸家は器を作るが、見えないものや、形のないものを盛る器を作ることにより新しい表現が可能だと考え、2010年には、音を盛る器というコンセプトでHIBIKIを制作した。2012年からは、光を盛るための器というコンセプトでKAGAYAKIシリーズを制作している。本体には、焼成すると半透明になる土を使用し、作品内部に光源を入れ作品を発光させている。

私の作品は、工芸であり、現代美術でもある。日々、その交差点あるいは臨界点を提示できないだろうかと考えている。そして新しい領域あるいは様式を展開できないだろうかと考えている。発表の場も最近では、大地の芸術祭、神戸ビエンナーレ、BIWAKOビエンナーレなどの現代美術のイベントに出展することが増えている。また陶芸の分野ではこの10年ほど、レジデンスやワークショップ、展覧会等で台湾、ロシア、インド、アメリカ、韓国等の海外に行く機会が増えている。海外に出ると日本の工芸とクラフトは同意義でないことを良く感じる。大概の国でクラフトとアートは分かれており、陶芸では、器を作る作家は器だけ、アートピースを作る作家は、アートピースだけであるが、日本の陶芸家は、どちらも作れ、作品として発表している作家が多い。歴史的な背景、大学の陶芸教育、日本経済等が起因しており、クラフトとアートの境が曖昧と言える。

このようななか最近、自分が何処にいて何をしたいかを明白にする事が大事だと考える。世界の中で何を背景に何をしたいかという横軸的な値と、工芸史、現代美術史の文脈のなかで何を継承しどの様に展開してゆくかの縦軸的な値において。工芸史、陶芸史での立ち位置は分かるが、現代美術史、美術史での位置はそれらが大きすぎて把握が難しい。陶芸家、現代美術家、どちらでもある、どちらでもない、或いは新しい領域、いずれにせよ現代美術に一步踏み入れた以上、美術史の中での座標を把握することが必須と言えよう。

IAC 国際陶磁アカデミー会員 田中哲也

作品展示事例①

BIWAKO ビエンナーレ 2007 風土-Genius Loci 会場風景 2007年9月30日～11月18日
主催 NPO エナジーフィールド 近江八幡市街（滋賀県）

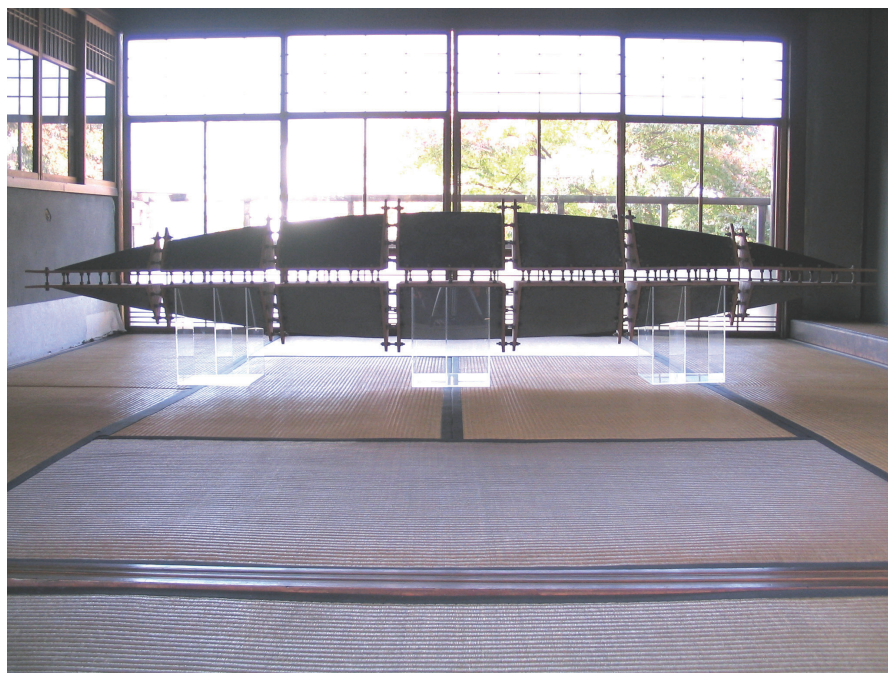


図 1



図 2



図 3

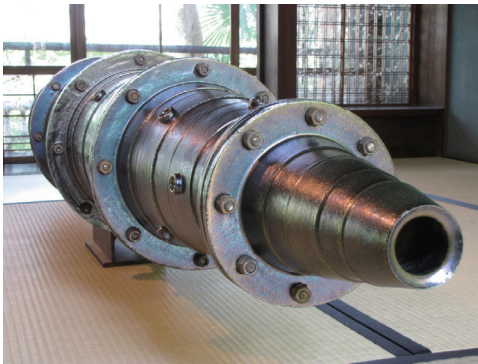
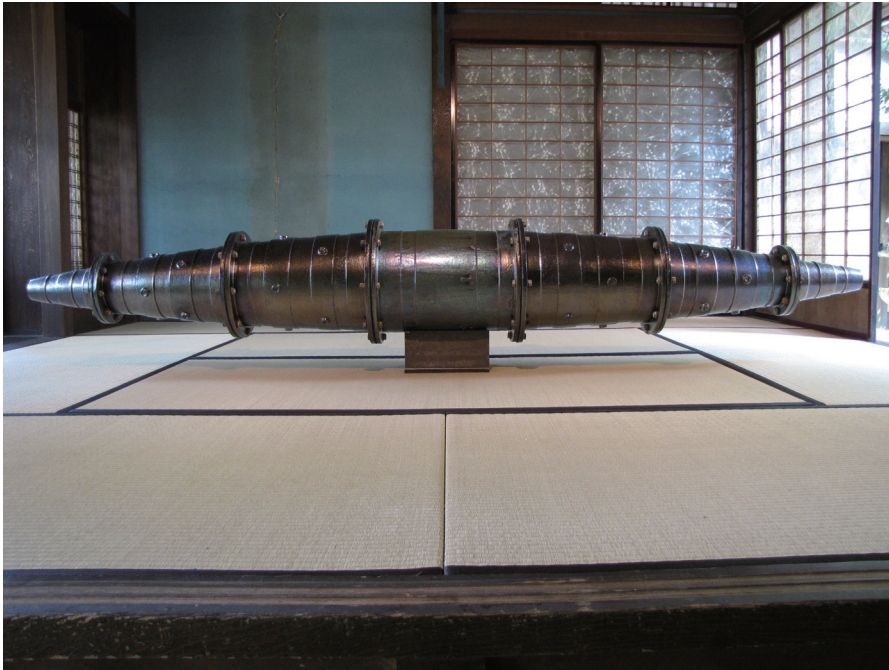
図 1, 2 空 (QOO)-近未来ノスタルジー 2007年 70×320×33cm ミクストメディア 陶、ボルト、ナット

天籟宮二階の六畳間、八畳間に展示した。六畳間には、茶道具、花器（図 3）を展示し、八畳間には、空 (QOO)-近未来ノスタルジーを展示。会期中に空 (QOO) を見ながら、お茶を楽しんで頂くというワークショップを行った。

その時の模様は、動画で <http://www012.upp.so-net.ne.jp/tclaywork/movie.html> より見る事ができる。

作品展示事例②

BIWAKO ビエンナーレ 2010 玉手箱 Magical World 展示風景 2010年9月18日～11月7日
近江八幡市街（滋賀県） 主催 NPO エナジーフィールド



響器-HIBIKI 2010年 50×286×41cm ミクストメディア 陶、ボルト、ナット、H鋼 その他デバイス
として マイク、アンプ、スピーカー、赤外線センサー

ろくろで挽いた土管状の陶器をボルトとナットで連結させ、ひとつの作品にした。この作品のろくろ技術は独特のもので、連結させた時にきれいなカーブが出るように、設計時にへら状の型を作る。

「響器-HIBIKI」のコンセプトは、音を盛る器。作品の前に立つと室外の音が、作品内部から聞える仕組みになっている。それまで微かに聞えていた外の音が、急に大きく聞えることによって、鑑賞者は、今まであった障子や壁がなくなったような覚醒した感覚を覚る。

人の脳の情報は、80%視覚から得ているといわれている。響器を見て、視覚情報により、一見、金属に見える物体は一体何だろうと思う。そして音が聞えて、その音が何の音で、何処から聞えてくるか分かるまで数秒間掛かる。やがてその音は消え、その場に静けさが戻る。室外の音は、室内が静かであるから聞える。普段、意識しない室外の音を聞くことによって、その場が静かであることを再認識される。

「響器-HIBIKI」には、室外の音を盛ることにより、静けさを盛った。

作品展示事例③

大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2012 展示作品

※写真は、滋賀県野洲市兵主大社 滋賀県重要文化財楼門のライトアップに伴う展示



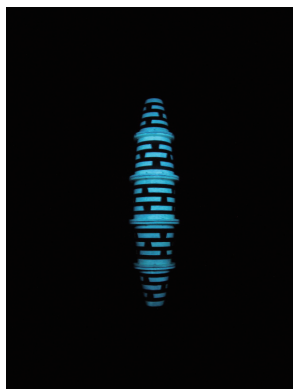
輝器 -KAGAYAKI 2012年 輝器本体：288×36×36cm 立体枠：360×151×145cm

表現媒体 ミクストメディア 信楽透土（滋賀県登録商標 信楽透器）、太陽パネル、輝度センサー、ブラックライト蛍光管、蛍光材、アクリルボルト、アクリルナット

輝器本体には、2009年に信楽窯業試験場で開発された焼成すると半透明になる土、信楽透土を使用した。電源は太陽電池（一部コンセントより供給）、光源は通称ブラックライトと呼ばれる不可視光を使用した。作品内部には、蛍光顔料が焼付けてあり、ブラックライトを浴びることにより発光する。この還元・再生のプロセスにより生まれる光が、人々の魂を浄化させるようなものとなればと思う。

作品展示事例④

BIWAKO ビエンナーレ 2012 御伽草子〜Fairy Tale 展示風景 2012年9月15日〜11月4日
近江八幡市街（滋賀県） 主催 NPO エナジーフィールド

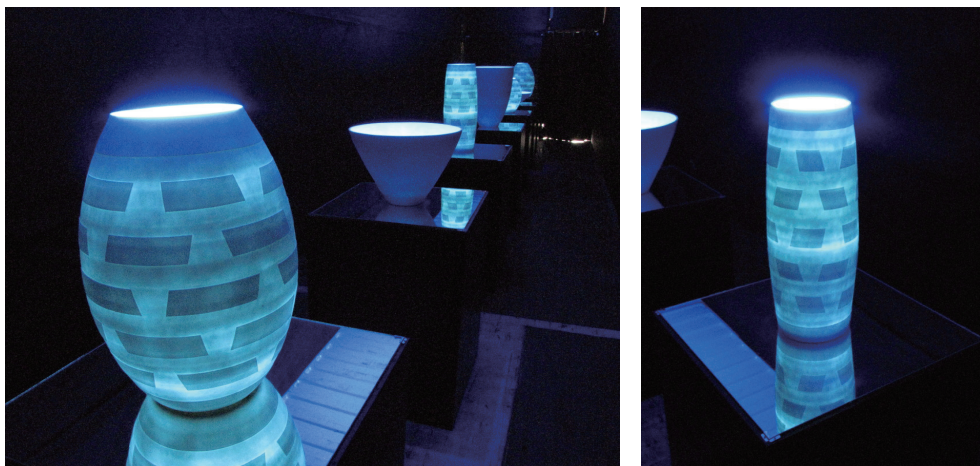


輝器 (KAGAYAKI) - COCOON 2012年 120×28×28cm

表現媒体 ミクストメディア 信楽透土（滋賀県登録商標 信楽透器）、ブラックライト蛍光管、LED
ブラックライト、スイッチタイマー、蛍光材、蓄光材、アクリルボルト、アクリルナット

光の器というコンセプトでの2作目。光源はブラックライト蛍光管とLEDブラックライト（スポットライト型）、作品内部には、蛍光材を焼付け、外側には、蓄光材を成形時のデザインにそって、凸部に塗り、焼き付けた。スイッチタイマーを使用し、光源を約1分ON、約10秒OFFを繰り返す。ON時は、作品内部の蛍光材が発光し、OFF時は、外部の蓄光材が発光する。この作品においては、光の神秘性を求めた。

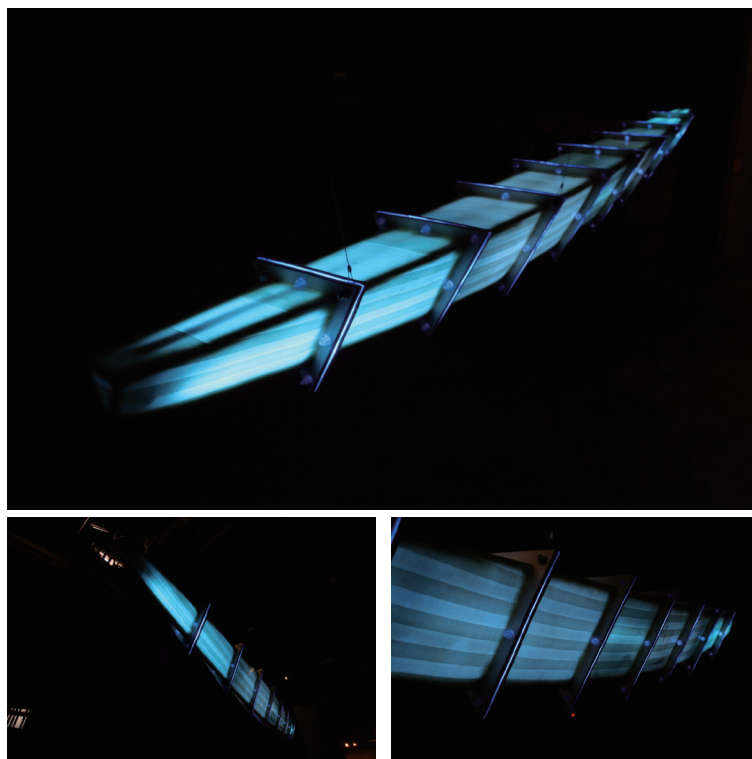
作品展示事例⑤



輝器（KAGAYAKI）- 光の器 2013年

表現媒体 ミクストメディア 信楽透土（滋賀県登録商標 信楽透器）、ブラックライト、蛍光材
神戸ビエンナーレ2013 アート イン コンテナ国際展 展示風景 2013年10月1日～12月1日 神戸市周辺

作品展示事例②



輝器 KAGAYAKI - Vessel of Light 30×250×40cm 2014年

ミクストメディア 信楽透土、ブルー蛍光管、アクリルボルト、アクリルナット 撮影：藤井友樹
BIWAKO ビエンナーレ2015 泡沫 展示風景 2014年9月13日～11月9日 近江八幡市街（滋賀県）

書道アートをめぐって（その5）

横山 豊蘭 *Houran Yokoyama*

（美術学部）

名古屋芸術大学主催の現代アート展「ボーダーレス展」は、2017年10月7日（土）～10月29日（日）まで、名古屋市中区丸の内にあるアートラボあいち大津橋会場で開催された。今回、私は作家としてではなく、プランニング、ディレクターを務めさせて頂いた。同時に10月13日（金）～18日（水）まで、大学内A&DセンターギャラリーBEとギャラリーbeで「書道アート展4」を開催、キュレーションをおこなった。また現在、2018年に岐阜美術館で開催される清流の国ぎふ芸術祭「ぎふ美術展」の企画運営委員を務めさせて頂いている。2017年度、毎日新聞社主催「富士山学生書写書道展」では、名古屋芸術大学書道アートとして最優秀団体賞を受賞。個人賞として、姫野綾花（人間発達学部、4年）が最高賞である毎日新聞社賞を受賞、池上夢与（洋画4年）が県教育会会長賞、海野悠子（洋画3年）が大学書道学会会長賞を受賞。11月26日（日）、静岡市民文化会館で表彰式が開催された。

「ボーダーレス展」

2017年4月、名古屋芸術大学は、音楽・美術・デザイン領域が「BORDERLESS」に統合し、芸術学部芸術学科として生まれ変わった。今回の「ボーダーレス展」は特に、3つの領域を超えた共同企画展として、音楽・美術・デザイン領域の卒業生から、田中副学長、津田副学長、大崎教授によって、それぞれの領域から2名程度、計7名の作家が選出された。テーマは、領域を超えたボーダーレスなコラボレーションである。

現代は「ボーダーレス」な時代、すでに名古屋芸術大学の卒業生の中には社会でボーダーレスに活動する作家達が多くいる。私は本来、書道家、アーティストとして活動しているが、今回の様にディレクターとして、「点」で活動する作家達を「線」で繋げ、年代を超えた「出会い」の状況を作るという役割は、私の活動の中心的な要素でもある。まさに「書道アート」は、東洋のハードコアである「書」と、西洋のハードコアである「アート」(ART)を融合させ、日本における「書道」と「アート」の境界線を曖昧（ボーダーレス）にする。それは決して心地よいだけではない。強烈な矛盾と向き合うことでもある。しかし、それは現代社会を見つめ、また現代に生きる為のアートとしては必須の事柄だ。私自身、名古屋芸大を卒業後、東京で領域を超えた交流をし、名古屋芸大の友人との仕事も数多くおこなってきた。今回のボーダーレス展フライヤーでも題字を書かせて頂いたが、これまで私は、書道家・アーティストとして、ギャラリーや美術館、そしてそれ以外のパブリックな空間での作品展示、書を使用したデザインや広告、書道パフォーマンスイベントなどの出演、音楽、照明、演出や、ラジオやテレビへの出演など様々な表現活動をおこなってきた。ライフワークとして行って

いる幼稚園児から90歳以上のすべての年齢層の方々への書の指導。海を越えて、海外での「書画会」などの活動。私の著書「書道の教科書」は、2018年、中国語版が発売される事になっている。書はアートとして、年代も領域も、国境も越えている。

名古屋芸大を卒業後の私の活動にとって、社会の中でのボーダーレスな交流は当然の事だった。友人との出会い、仲間との仕事、それによって様々な活動をさせて頂いてきた。それは学生時代、キャンパス内での領域を超えた友人との交流、あるいはサークル活動などの「遊び」の中での「学び」がベースとなっている。現在取り組んでいる書道アート部の積極的な活動も、そういった理由からである。テキストを書いている現在、名古屋芸術大学「ボーダーレス展」は開催中である。今回、大変有意義な経験の機会を頂き感謝している。

Intellectual · Art · Occupation 「知的・アート・職業」

学生や保護者にとって、芸術によって「生活できるのかどうか」という漠然とした問題、同時に切実な問題が、今後の大学選びの重要な選択肢になっている。アーティストであっても「生活」がある。もし「ビジネス」「就職」という言葉が芸術的でないとするならば、日本語で近いのは「生業」あるいは「業」という事になるだろうか。

書という感性と、書道という文化（様々な領域を研究、理解し、繋げる感性）

書道という文化は、日本人の文化的気質に密接に関係しているからこそ愛好家が多く、公募展でも多くの出品者がある。そこには様々な書道団体による組織、書の周辺には「表装業」「筆」「墨」などの製造業、様々な業者、業界による「職業」「生業」があり、書の周辺の人々の生活という基盤がある。しかし、以前話題となった日展問題の様に、公募展制度の問題と批判あった事は周知の事だ。近代化以降、戦後日本におけるジャンルの形成を担保してきた公募展が、小説家の高橋源一郎氏の言うように「戦後70年の日本の民主主義と共に制度疲労を起こしている」。ある意味ではそれも、現在の芸術におけるボーダーレスな状況を引き起こしている理由の一つであるだろう。

書道は本来「文字」を書くという認識が一般的だろうと思う。文字を書く事は、領域を分ける事そのものだ。文字は概念を形成し、様々な事物に命名し、分断する。現代書によって、書家が「文字を書かない」事も実践されてきた。しかし、「線」を引く事は、領域を分ける事である事に変わりはない。その証拠に、前衛書という「ジャンル」が形成され、形骸化していった。現代書も、現代美術と同様に「古い言葉」となっている。領域は常に混沌から形成され、その時代に一定の秩序と平成を与えると共に領域間のぶつかり合いを生む。そうやって歴史は作られて来ただろう。書は常に物事を分断し、同時に繋げる。書を書く事は矛盾そのものと向き合う力でもある。

そういった書の本来性は、現在の書教育で正しく理解され伝わっているとは言い難い。また、書家によって価値観は様々であるし、書の教育現場において、また寺子屋的な書道教室などにおける教育的クオリティーも様々だ。高校、大学の学校教育も含

め、もともと「書道芸術」の世界は「混沌」としている。また、日本の書道文化にまつわる様々な慣習に問題もあった事も事実だ。しかし、だからといって「書」そのものの価値が下がるという事ではない。日本には、書道文化という日本独自の、表現にまつわる文化的基盤がある。周辺にある様々な日本独特の文化や勲業が、戦後の書道業界を後押しし、ある意味ではこれは大きなエネルギーの宝庫だった。

現在、時代と若者の価値観は変わりつつあり、今のままでは、書は日本のアートとは言えない。もうひとつ上の目線を設定する必要がある。例えば、書という東洋的ドゥローイングによって、知性と感性によるバランス感覚、芸術と社会、自身と社会を繋げる感性を磨くこと。日本の書の本来性は「消息」（手紙）と和歌にあり、本来、自身と他者を繋げる為に日本の書は存在する。これまでの海外での活動から、西洋文化のコアを知るにARTを学ぶ必要があると同様に、東洋のコアを感じてもらう為に、西洋人に書を伝えるのは有効だと私は考えている。東洋の「書」（東洋的ドゥローイング）を通じてしか会得できない感性がある。また、日本美術や東洋芸術の感性が、ヨーロッパにおいて特異だったのは、書文化があったからであり、フランス、パリでの藤田嗣治の成功も、その一例と言えるだろう。筆記用具がペンやワープロになる以前は、筆が筆記用具であり、書はすべての日本人の必須教養だったのだ。洋画家、日本画家を問わず、全ての人々にとって、毛筆と墨が身体の一部であった。筆と墨で「何か」を書くという意味では「誰もが書家」だったと言えるのだ。そういった基本的感性、素養を、当時の人々は知らず知らずのうちに、書を通じて身につけていたのではないかと私は考えている。書という高度で東洋的なバランス感覚を身につける事によって、アートと社会、アートとデザイン、ビジネス、広告、マスコミ、テクノロジー、日本文化、食文化など、様々な異分野を繋げる感性を持ち、芸術的感性をもって実社会で活躍できる人材を育成したい。また、学生にとって「就職活動」における知識や教養とは別の、実社会に対応する「作法」を身につける事も必要だろう。書を学ぶ事は、同時に東洋や日本古来の思想を学ぶ事でもある。「茶の本」や「武士道」などが、欧米において、現在も「ビジネス書」としてベストセラーであり続けている事も、見逃す事はできない。

近年、アートの世界では「日本アート」という言葉も広がってきている。現在の日本にフィットする、日本人の感性、日本文化を基盤にした新たなアート、書のアートによる芸術教育の可能性を私は今も信じている。

「書道アート」「洋画2コース実技」非常勤講師 横山豊蘭

●タイトル 『ボーダーレス』展

テーマ ボーダーレス・コラボレーション

会期 2017年10月7日（土）～10月29日（日）

開館時間 11:00～19:00 ・開館日（金曜～日曜・祝日）、休館日（月曜～木曜）

オープニングレセプション 10月7日（土）18:00～20:00

アーティストトーク 10月13日（金）17:00～18:00

出品作家 佐藤美代、田中翔貴、鳥巢貴美子、中田ナオト、原田裕貴、細井博之、
松田るみ

会場 アートラボあいち大津橋会場3F 愛知県名古屋市中区丸の内三丁目4-13
愛知県庁大津橋分室3階

主催 名古屋芸術大学

企画 音楽領域／美術領域／デザイン領域 共同企画

総合プロデュース 田中範康／津田佳紀／大崎正裕

プランニング・ディレクション 横山豊蘭

フライヤーデザイン 渡辺浩之

協力スタッフ 山口諒（洋画2コース助手）／池上夢与／竹内創也／藤原 葵／
伊藤 真／海野悠子／佐藤元紀

●タイトル 『書道アート展4』

会期 2017年10月13日（金）～10月18日（水）

開館時間 12:15～18:00 休館日10月14日、日曜。

クロージングレセプション 10月18日（水）14:00～16:00

アーティストトーク 10月18日（水）16:30～17:30

出品作家 海野悠子、小浦知也、伊藤真、池上夢与、藤原葵、竹内創哉、杉山美紀、
本間恵里加、横山豊蘭

会場 名古屋芸術大学 A&D センター ギャラリーBE、ギャラリーbe

主催 名古屋芸術大学 書道アート

企画 キュレーション／フライヤーデザイン 横山豊蘭

協力 大崎正裕

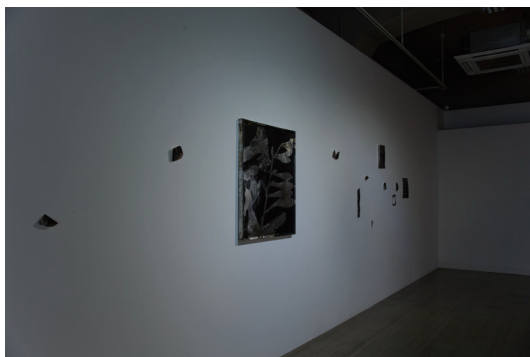
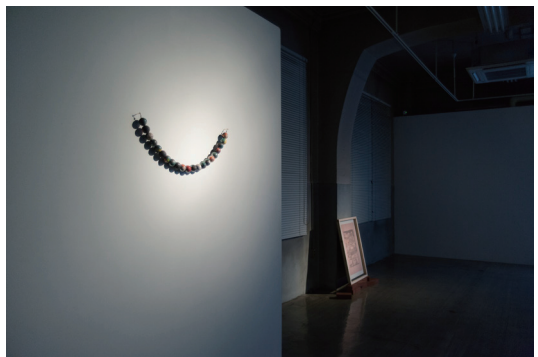
『ボーダーレス』展 2017年10月7日(土)～10月29日(日) アートラボあいち大津橋



オープニングレセプション 竹本学長あいさつ



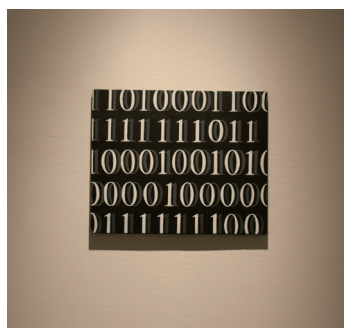
会場展示風景



『書道アート展4』 2017年10月13日（金）～10月18日（水）A&Dセンター ギャラリー BE、ギャラリー be



会場展示風景



・池上夢与氏によるパフォーマンス



・トークイベント アーティストトーク 10月18日

名古屋芸術大学研究紀要 第 39 卷 別冊（作品集）

2018年3月8日印刷

2018年3月15日発行

発行者 名 古 屋 芸 術 大 学

〒481-8503 愛知県北名古屋市熊之庄古井281番地

印刷所 有 限 会 社 も く も く 印 刷